

2021年12月19日 『救い主誕生の告知』 高橋克樹牧師

聖書 サムエル記上2章1〜10節、ルカ福音書1章39〜56節

エリザベトとマリアが会ったとき、胎内の先駆者ヨハネは、マリアの胎内の主に出会った喜びで踊ったという。しかし、実は先駆者ヨハネはイエスが「来たるべき方」であるかどうかの確信が全くなかったのです(ルカ7章18〜19節参照)。エリザベトとマリアが象徴する先駆者ヨハネと救い主イエスの関係は歴史的な事実重点がおかれているのではなく、この二人は神があらかじめ定めた目的に従って出会った出生前の関係性なのです。

39節冒頭は新共同訳では『そのころ』と訳されているが、原文は「これらのことがあつてから」となっていて、エリザベトが身ごもつてから6ヶ月目、マリアが聖霊によって神の子を懐妊したころ、にマリアはエリサベトに会いにでかけていったのです。この『出かける』(アニステミー)という言葉は「立ち上がる」というのが本来の意味で、マリアに聖霊の力が臨んで、彼女はナザレからユダの町へ出立したのです(1章26節参照)。「山里」(オペイネー)は高地にある「山地」のこと。ユダの町の名称は不明ですが、山地にある小さな町なのでしょう。マリアはエリザベトの家に三か月ほど滞在しました(1章56節参照)。41節冒頭はカイ・エゲネトで始まっています。これは神の関与によって事が起こったことを示しています。そして、エリサベトの胎内の子ヨハネはイエスの母の声を通してイエスの存在を聞き、喜んだのでした。この喜びを実現させたのは、二人を出会わせた天使であり、その天使が仕える神によって超越された出来事でした。その神はエリザベトの胎内の子ヨハネを聖霊で満たし(1章15節)、神の子イエスを身ごもつたマリアに出会ったエリサベトをも聖霊で満たしたのでした。41節の『おどつた』(スキルタオー)は44節でも同じ語が用いられており、70人訳の創世記25章22節で、イサクの長男エサウと二男ヤコブの双子が「押し合う」と訳された語と同じです。なぜ、ルカ福音書記者が創世記のヤコブの誕生物語を参考にしたのか？ それは成人してからの二人の使命が胎児のうちですでに内包されていることを示したいからです。双子が胎内で押し合う＝小躍りするのを心配した母リベカは当惑してヤハウエの聖所に行き、子供の将来についての託宣を受けました。ルカ福音書記者はエリザベトの胎内の子ヨハネが神の使命を受けていることをヤコブ誕生物語をヒントにして読者に分からせようとしたのです。

42節『あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています』は、単にマリアの母性を讃えているのではなく、この母性がひとえに『主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしよう』(45節)というマリアの信仰を讃えているからであり、さかのぼればマリアが『わたしは主のはしためです。お言葉とおおり、この身になりますように』という彼女の信仰的決断をたたえているのです。

『胎内のお子さまも祝福されています』の原文は「あなたの胎内の実(カルボス)は祝福されています」。マリアの胎の実が良い木が良い実を結ぶように(ルカ6章43節)、聖なる霊が結んだ聖なる実であり、この実は神によって祝福されている。しかし、この祝福された実であるイエスは、種が地に落ちて百倍もの実を結ぶように(ルカ8章8節「良い地に落ち、生え出て、百倍の実を結んだ」、ヨハネ12章24節)、自らの命を落としたのちに多くの人々の内に信仰の実を結ばせるのである。イエスに祝福が与えられたのは、イエスを通して多くの人々に祝福が分け与えられるためであったのです。

43〜44節 胎内のヨハネが喜び、小躍りすることで、エリサベトはマリアが主の母＝メシアの母とい

うことを悟ります。ヨハネはイエスの先駆者であり、主イエスの到来のための準備をする役割を担っている。当然イエスの登場を待ち望んでいた。胎内のヨハネが喜びのあまり踊ったというのは、ヨハネが待ち望んでいた救い主イエスが到来したことを知ったということであり、そのことを胎内にいる段階で聖霊によってヨハネは知ったのでした。

さて、4-6節以下のマリア賛歌でも、この箇所を読む者はエリサベトに同調して、マリアを女性の中で最も祝福された存在とみなしがちです。4-6節以下を読んでみます。「マリアは言った。「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。身分の低い、このはしためにも目を留めてくたさったからです。今からのち、いつの世の人も わたしを幸いな者と言うでしょう、力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。」このように、マリアは自分自身を幸いな者とみなし、身分の低い自分に神が目を留めてくれたことを感謝していますが、このマリアの讃歌の中で彼女自身は自分の胎内の子が救い主なるメシアになることは認識していません。

たとえば、ルカ福音書の11章27節以下を見ると、群衆の中のある女性がマリアを「なんと幸いなことでしょう。イエスを宿した胎、あなたが吸った乳房は」とたたえたのに対して、イエスが「むしろ、幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人たちである」と叱責したことをみても、母マリアはイエスの使命について特別に深い理解を持っていたから祝福される存在ではなく、自分が神に仕えるために特別に選ばれたという驚くべき約束に対し、主の言葉が実現すると信じたことがマリアの信仰の本当の姿なのです。

マリアがエリサベトに会いに行ったことで、エリサベトの胎内のヨハネが救い主に出会った喜びでおどったことを見ると、救い主誕生の知らせは天下に広く告知されたのではなく、救い主を待望している人に偶然に分かった出来事として描かれています。救い主イエスの先駆者となるヨハネも、神の摂理によってたまたま出会ったことで胎内でおどったわけで、決してこの後自分が成人して救い主イエスの事を告知する者となるとは分かっていなかったのです。

このように、救い主イエスの誕生はイエスが公生涯に入るまで世間の目からは隠されていたのです。もちろん、メシアン誕生はこの時代の権力者たちには恐れられていたのですから、幼い時に殺される危険性もあつたからでしょうが、母マリアにも明確には知らされなかったのです。ただマリアは神が自分の身に偉大なことをされた認識だけは持っていた。そのことを拒否しなかった。実は、救い主イエスの存在は、誕生した後も、公生涯に入った後も、十字架上で殺された後も、復活して弟子たちに現われた後も、ずっとその存在が否定される歴史を歩んできたのです。救い主誕生の喜びを祝うクリスマスの時、改めてイエスが歴史の中で拒絶されつづけてきたことを思うとき、マリアの信仰的な確信の大きさが救い主の誕生を生みだした原動力であつたことを讃えたいと思います。